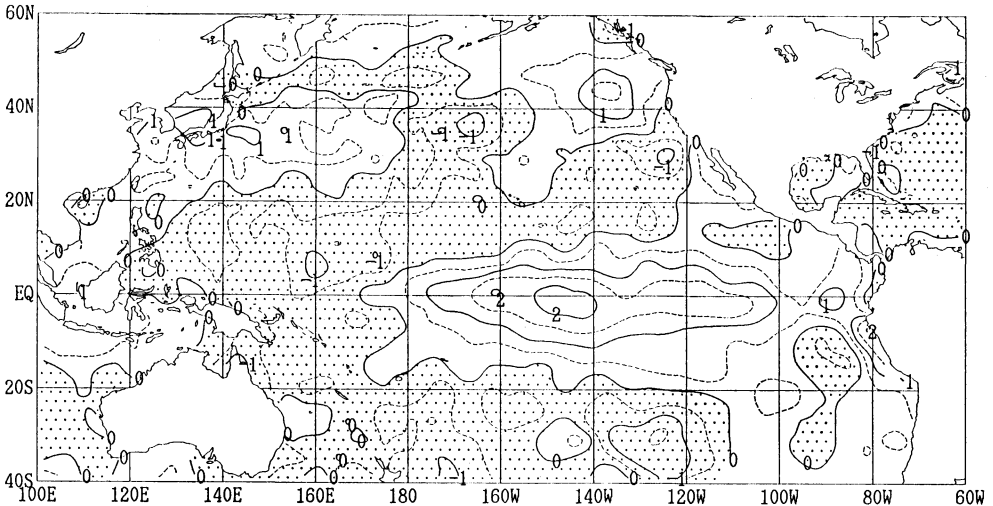


ENSO の現況 (1992年1月)

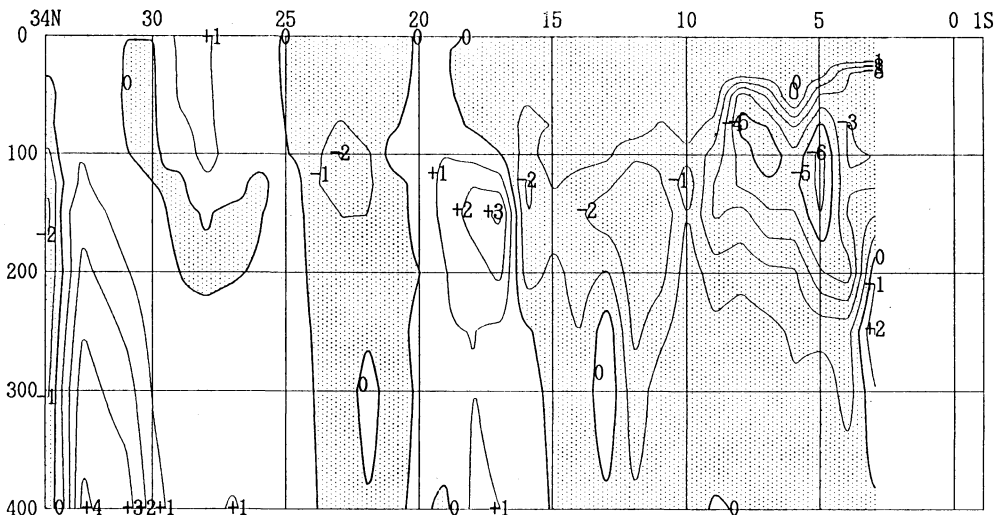
昨年春に発生したエルニーニョ現象は、昨年末から強まり、大気側にもエルニーニョ現象時にみられる特徴が現れた。

赤道太平洋の海面水温は、150°~140°W で平年より2°C以上高く、ペルー沿岸域でも2°C以上の正偏差となった。エルニーニョ現象の指標として用いられている



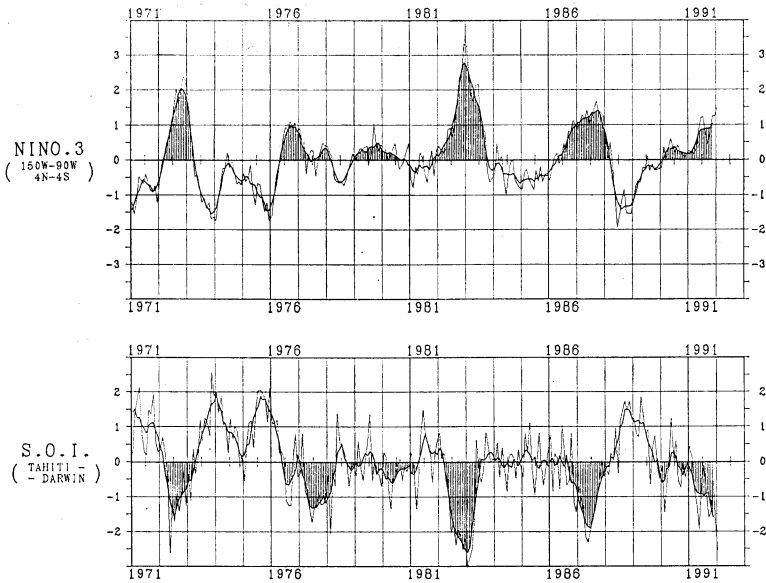
第1図 1992年1月の海面水温平年偏差(°C)

平年値は1961年~1990年の30年平均、陰影部は平年より低いことを示す。

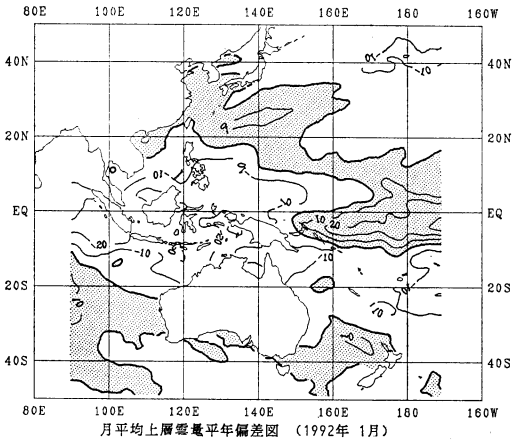


第2図 1992年1月(1月20日~2月2日の観測)の137°E線に沿った表層水温の平年偏差(°C)

平年値は1967年~1990年の24年平均、陰影部は平年より低いことを示す。



第3図 (上) エルニーニョ監視海域 (150°~90°W, 4°N~4°S) の月平均海面水温年偏差の推移 (°C)
 (下) タヒチとダーウィンの海面気圧年偏差の差から求めた南方振動指数 (SOI) の推移
 それぞれ、細線は月平均値、太線は5ヵ月移動平均値を示している。



第4図 1992年1月の「ひまわり」で観測された西太平洋地域の月平均上層雲量の年偏差(%)
 年偏差は1979年~1990年の12年平均、陰影部は年より上層雲量が多いことを示す。

赤道域東部 (150°~90°W, 4°N~4°S) の領域平均海面水温偏差は、1月に+1.4°Cとなり、9月から1月の5ヵ月平均値の+1.0°Cとともに、1987年以來の最高値になった。

これに対して、170°E以西の熱帯域は広く負偏差におおわれた。気象庁の海洋気象観測船「凌風丸」の137°E線に沿った観測によると、3°~16°Nの表層水温は200mより深いところまで年より低くなっており、西太平洋では表層の暖水が減少しているといえる。

一方、大気側の指標である南方振動指数 (SOI) は、1983年以來の最低値である-2.5となり、東西循環がかなり弱まったことを示している。これに対応して、160°E以東の赤道域では年よりも対流活動が活発になっており、その中心は、中部太平洋の160°W付近まで東に移った。東南アフリカからオーストラリア北部にかけては、逆に活発な対流活動がほとんど見られなかった。

これらの特徴は、過去のエルニーニョ現象の成熟期にみられたものとほぼ一致している。

(気象庁海洋課 木村吉宏, 長期予報課 山田真吾)